

太一じぞう

清水道尾 作

斎藤博之 画

岩崎少年文庫 3



岩崎少年文庫 3

太一じぞう

NDC 913 東京 岩崎書店 1973 168 p. 22cm

岩崎少年文庫 3

太一じぞう

一九七二年五月一〇日 第一刷発行
一九七三年九月一〇日 第三刷発行

作者 清水 道尾

画家 斎藤 博之

発行者 岩崎 徹太

印刷所 ケイエムエス／清水印刷紙工

製本所 小高製本工場

発行所 株式会社 岩崎書店

東京都文京区水道一丁目九番二号

〒112 電話(812) 9131

振替 東京 九六八二二

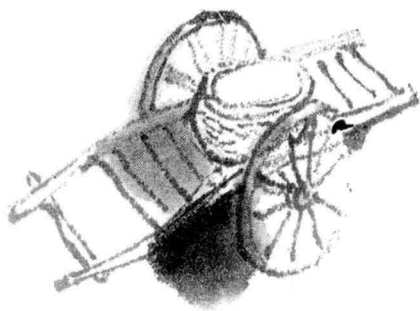
©清水道尾 一九七二

(分)8397 (製)500372 (出)0360

清水道尾 作／斎藤博之 画

太 一 い ぞ う

岩崎少年文庫 3



もくじ 太一じぞう

太一たいいちじぞう

一 はたらきものの夫婦ふうふ……………八

二 良一と次郎……………一七

三 甲種合格こうしゅごうかく……………三

四 戦死公報せんしこうほう……………三

五 次郎の出征しゅつせい……………四七

六 戦勝せんしょうにわきたつなかで……………五七

七 若ものがいなくなつた村……………六七

八 にかい酒……………七一

九 むざんな死……………六八



金^{キム}さんといもあめ

一 母の死……………一〇〇

二 出合い……………一二三

三 ぞうすい……………一三三

四 白い乳房^{ちゆうぶさ}に……………一三〇

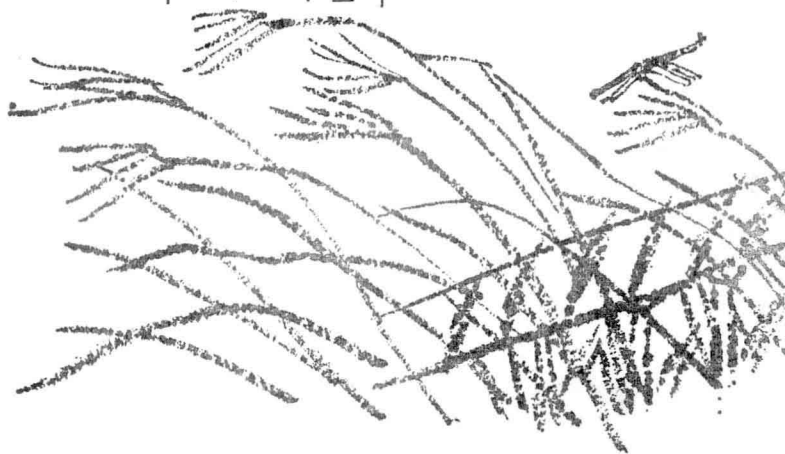
五 そのころ、朝鮮の人たちは……………一二二

六 はじめての微笑^{びしょう}……………一五〇

七 「カシ(菓子)ってなあに」……………一五三

八 わかれ……………一五八

あとがき……………一六五 装幀 挿画・斎藤博之





著者紹介

清水道尾

一九三三年、岐阜市に生まれる。

子供図書館ぐがやま文庫主宰。日本児童文学者協会会員。日本子どもの本研究会々員、親子読書・地域文庫全国連絡会副会長。

著書Ⅱ絵本「はじめてのおるすばん」「ひとりでおつかい」(以上岩崎書店)、「せいちゃんのおんどり」(サン企画)。実践研究書として「読みきかせの発見」(岩崎書店・共著)「新しい幼児のための読書教育」(金の星社・共著)などがある。

住所Ⅱ東京都杉並区久我山3―17―21―306

太^た
一^{いち}
じぞう





ブローグ

昭和二十年八月十五日——日本が太平洋戦争に敗れたあの日、二歳になったばかりの妹の名を呼びながら死んでいった母の墓参りをするため、十数年ぶりに故郷をたずねたわたしは、境川にかかっている土橋を渡ろうとして、立ちどまりました。

そのとき、わたしは、太一つあんのことを思い出したからです。ところが、たしか、この橋のたもとにあったはずの「おじぞうさま」のすがたが見あたりません。おりよく、川べりで四年生くらいの男の子が泥んこになってザリガニをとっていたので、

「ねえ、このあたりにあった、太一じぞうさん、どこへいきなさったか知らない？」

と、たずねますと、その子は、へんなことをきくおばさんだなあ——といううな表情で、わたしの顔をマジマジながめ、だまって首を横にふりました。

無理ありません。あのころ、見渡すかぎりひろがっていた田や畑に（区画整

理（り）というのでしようか）赤土（あかつち）を盛（も）った道（みち）が縦横（じゅうおう）にのび、ここに三軒（さんけん）、あそこに五軒（ごけん）と、新しい家が建（た）ちはじめているのです。こんな田舎（いなか）にまで、都市化（としか）の波（なみ）がおしよせてきたのかねエ——と、わたしは、なにか新しい発見（はっけん）でもしたように眺（なが）めながら、なわてを歩いてきたばかりでしたから。

でも、村（むら）で指折（さしお）りの働（はたら）きもの一家（いけ）として知られていた太一（たいつ）つあんたちが、あの戦争（せんそう）という大波（おおなみ）に、みるまに飲（の）み込まれてしまったむごたらしい記憶（きおく）が、こんなにも早く風化（ふうか）してしまったことに、わたしは、なんとも納得（なつとく）がいかないのです。





一 はたらきものの夫婦

わたしが小さかったころ、となり村に太一^{たいいつ}あんというお百^{ひゃく}姓^{しやう}がおりました。大柄^{おおがら}で、胸^{あつ}の厚^{あつ}い太一^{たいいつ}あんには、おりんさんという、しつかりもののかみさんがいて、働きもの^{はたら}の夫婦^{ふうふ}として知られていました。

太一^{たいいつ}あんは、めつぽう無口^{むぐち}なたちで、野良仕事^{のらしごと}をしているところを通りかかった村の人が、

「太一^{たいいつ}あー、よう精^{せい}が出るのう」

と声をかけると、いまにも消え入りそうな声で、

「なんのなんの」

と、いうだけでした。

酒もたばこものまず、ご先祖^{せんぞ}から受けついで田や畑で、せつせと働^{はたら}いていました。だから、その田んぼでできる米^{こめ}は品質^{ひんしつ}がよく、毎年秋、とり入れがすんでから行なわれる品評会^{ひんぴやうかい}では決まったように入賞、二年続けて「優等賞^{ゆうとうしょう}」をもらった



こともありました。また、畑でとれるかぼちゃ、なすびも「色つやから、味まで格別だ」と農業会の書記さんが、手ばなしでほめるほどのできばえでした。

野良仕事には精を出す、それでいて酒はのまない——という太一っあんは、近所のかみさんたちにとつて、のんべえおやじにお灸をすえるための、ねがつてもない人物だったのです。

「お前さが、そげにのんだくれちゃあ、いつまでたっても水のみ百姓のくらしからはいあがることはできやせん。太一っあをみんさい。お前さは男じやもの、太一っあにできることが、やれんことはあるめえに……」

と、まくしたてられると、たいていのおとつっあんは、

「あれは別格やで」

「なみの人間やないんじやから……」

とボヤきながら、すつかりへこまされてしまうのでした。

のんべえおやじたちは、秋のとり入れが終わり、農業会の二階の広間で行なわれる、年に一度の総会には、手ぐすねをひいて集まるのでした。それには二つの目的がありました。まず、ただの酒をしこたま飲ませてもらえることです。

会長さんが、ひとことふたことみんなの苦勞をねぎらうと、待ってましたとば

かり、酒とするめが運びこまれ、ささやかな酒もりがはじまるのです。さつきから下の湯わかし場で焼くするめのおいに、舌なめずりをしていたのんべえおやじたちは、

「それッ！」とばかり、湯のみ茶わんで冷や酒をあおりました。なにしろ、この酒は農業会の経費で買ったもので、気がらくです。

もう一つは、太一つあんにさんさん毒つき、これをサカナにして、いっそうたのしく酔おうという魂胆があつたからです。

その日も、太一つあんは、でっかい体を小さくして、すみっこにすわっていました。この座の空気になじむことができず、

(早よ、終わらんかなあ)

とばかり考えていました。

そこへ、小学校でも同級だった隣家の万作さんが、もつれそうな足どりで近歩いてきて、まん前にドツカとあぐらをかき、「くそまじめ、めっちゃいう言葉があるが、こりやあ、おめやあ（お前）のためにつくつたと思うが、どうじゃ」

と声高こゝろだかにいうと、たちまち、四、五人ののんべえおやじが寄ってきて、

「おめやあのために、わしらがおつかあに毒どくづかれ、どのくれえせつねえ思いをしとるか、わかるめえが……」

とたたみ込みました。すると太た一いっつあんは蚊かの鳴なくような声で、

「へえ、すまんも。わしは、おりんがおそろしうて飲まんわけじゃあねえ。どだい（まったく）好きじゃあねえもんで……」

と、いいわけをするのです。

小柄こがらでガチャ目の作次さくじさんは、酔よっぱらうと、だれにでも、みさかいなしにからむくせがあります。

さつきから、作次さくじさんの目つきがあやしくなっているのに気がついた安三やすぞうさんが、これをあおりたてるように、わざと大声で、

村いちばんの働きもん

べっぴん女房にようぼうの手をとって

朝も早はやから

カンテラ さげてなイ

.....

と炭坑節まがいの、へんてこなうたを歌ったものだから、作次さくじさんは首の骨がゴキツと鳴るほど直角に太一つあんを見すえました。そして、ズングと立ちあがり、よろけながら太一つあんの前にくると、左手を兵児帯へこおびのあいだにはさみ、右肩をそびやかし、両の足をふんばって、

「やい、太一たいいち！ てめえはな、おれより三つも歳下とししたのくせしやあがつて、だれのゆるしうけて、そげに、どでかくなりやがった！ だいたいなまいきだぞ！ おれとおんなじ種たねまいて、てめえは一等米作りやがる。おれはなんだ、並米なみまいだと！ こんなべらぼうな話があるかよお。なあ、おい！ するてえと、なんだな。てめえは、からくりをしとるんだな。ふん。そうやろ、そうやろ。やい、太一たいいち！ た、ねあかせい」

いまにも太一つあんのえりくびにつかみかかろうとするのを、あわてた安三やすぞうさんと万作まんさくさんが両方からだきかえるようにして、

「おめやあの気持はわかる、ようわかるでな……」

と、なだめるのでした。



その万作さんですら、

「そんなもなあ、太一っあ。わしのかかあはな、口さえ開きやあ、太一っあ見んさい、おまはん（お前さん）とは月とスッポンじゃ、ちゆうて何千回ぼやいたことやら。ま、おたがいええ年齢になつたで、野良仕事はむすこたちにまかさなあかん。てめえで精出すこたあねえぞよ」

と、酒やけた赤黒い鼻先をひくつかせました。太一っあんは、ウンウンと、うなずいて、

「わしも年齢じゃで、若けえもんのようなわけにやあ、いかんわな」と、いうのでした。

そうはいうものの、家での太一っあんは、やる気じゅうぶん。

「おとつっあん、頭に白いもんが目立ってきたで、まあ、来年あたりにやあ、良一に嫁をとつたらんといかんなも」

おりんさんが、夕食のわんに汁をすくいながら、こういうと、

「そう早よから、わしをじじいあつかいせんくれや。まんだ、十年や二十年で、よいよい（中風）にやあならんぞヨ」